

創刊の辞

福祉文化研究会を母胎として、我々の研究誌「福祉文化」を創刊することにした。

創刊に至った経緯を確認しておく。平成11年4月島根大学教育学部に生活環境福祉課程が設置され、そこに生活環境コースと福祉社会コースが設けられた。社会の少子化に対応した学部改組であったが、新入生を迎えて課程やコースの内容を具体的に紹介するため、年度始めに設定した「生活環境合同セミナー」において、一泊二日の日程の一部を担当教官の講義にあてた。その内容が、セミナーに参加した教官にとっても相互に新鮮であった。この体験を踏まえ、福祉社会コースの担当教官は合同で福祉文化研究会を組織することにした。カリキュラム開発の意味も込めて、教官がその研究内容を発表し、それを学生と教官が共に聞く機会を持ち、併せて雑誌を出すことにした。

最初の相談がまとまったのは早かったが、その後は最近の繁忙を極める公務・行事のため、研究会の開催回数も多くもてないでいる。しかし、学生指導組織として設置された福祉社会教室は、その所属教官が教員養成課程を兼務する形を取っているけれども、教育の内実を保証するためにもこれを共同研究組織にしないといけないという決意は担当教官の全員にある。その思いがこの雑誌の創刊という具体的な形をとって現れたのである。

福祉社会コースの担当教官は二人の福祉専門教官を除いて、他は社会科教育と国語教育の専門研究領域にその軸足を置いている。したがって、アプローチの方法と研究対象の領域は、それぞれの専門領域に強く支配されている。このため、既成の概念にとらわれた視点からすれば統一性に欠ける観があるかもしれない。しかし、今回はこれに敢えて統一性を求めることをしなかった。我々が向かう方向は一つという強い確信があるからである。

教育学部に新設された課程に対する社会からの風当たりは必ずしも芳しくない。しかし、学生にとって入学した大学が心の故郷になることを思えば、教育内容について、我々はどこまでも責任を持っていかねばならない。その覚悟をもって今後の努力を続けるつもりでいる。ここに一つの文化圏が生まれると我々は信じているのである。

2001年3月31日